

プレシンポジウム 開催レポート

「版画と写真 19世紀後半 出来事とイメージの創出」

プログラムスケジュール

11月20日(日)

開会の辞

主催者挨拶 中島 三千男(神奈川大学副学長)

基調講演 木下 直之(東京大学教授)

「写真は出来事をどのようにとらえてきたか」

プログラム

<パネリスト>

・原信田 實(国際浮世絵学会会員)

「『名所江戸百景』における構図の新解釈」

・鈴木 廣之(東京文化財研究所日本東洋美術研究室長)

「変貌する明治の図録」

・増野 恵子(早稲田大学非常勤講師)

「見える民族、見えない民族 『輿地誌略』の世界観」

・金子 隆一(東京都写真美術館学芸課専門調査員)

「内田九一の西国巡幸写真」

パネルディスカッション

<コーディネーター> 北原 糸子(神奈川大学非常勤講師)

閉会の辞

木下直之氏(東京大学教授)は、「写真は出来事をどのようにとらえてきたか」と題する基調講演で、出来事とそれを伝えることの間にある隔たりについて、浮世絵の事例として、松本喜三郎の生人形興行の宣伝浮世絵に安政江戸地震で鍋をお救い小屋へ寄付し幕府から褒賞された吉原芸者おかねが話題性のある人物として取り上げられつつも、半身裸体で描かれ、芸者に対する世の中の蔑視を表出させていること、また、1874年創刊された新聞錦絵では題材となる新聞記事と描かれた錦絵との間には事件性を増幅させる絵師の強い作為とそれを受け入れる読者の存在があることを指摘した。写真については、江戸時代に自由な撮影対象とはなりえなかった城郭や江戸城内の写真が外国人には規制なく写真として外部に流れていた事実があること、さらには事実を映し出す写真とはいえ、当時の日本では現場を写せないという社会的制約あるいは報道規制があること、さらには写真では撮影不可能な場面をやらせの作為で臨場感を作る事例などがあることの問題も指摘した。つまり、事件や出来事の裏にある事実とは何かを見通す必要性を説いた。また、当時の社会的関心を集めた出来事であった災害写真は、戦争に先立つ形ですでに社会的に普及していたことなどが言及された。

原信田實氏(国際浮世絵学会会員)は、「『名所江戸百

景』における構図の新解釈」と題し、安政江戸地震との関わりで読み直すことを主張した。これまで美術史分野で、このシリーズは江戸の名所を描くものとしてのみ解釈されてきたが、原信田氏は近景を浮世絵の枠組みとして設定し、中景を省略、遠景に目を凝らすような構図の意味を、災害から復興する江戸の姿を重ね合わせると読んだ。また、必ずしも客観的な風景を描くものではない以上、そこに戯画としての眼差しとリアルに捉える眼差しが交差するものだとし、金龍山浅草寺や安政江戸地震で倒壊、焼失した松坂屋の復興大売出しに賭けた例などを示し、伝統的浮世絵も出来事を捉えるメディアだとする新説を披露した。

鈴木廣之氏(前東京文化財研究所日本東洋美術研究室長・現東京学芸大学教授)は、「変貌する明治の図録」と題する講演で、人が関わる事件や出来事ではなく、「物」の存在形態を伝える図録類の歴史に着目された。明治に入ると新しい印刷技術によって正確、精緻な大量の複製が可能になったが、その伝統は江戸時代後期の古物収集家の眼差しを受けつぐものであることを指摘された。さらに、写真の登場によって実物大にこだわらない縮尺技法を取り入れることで、さらなる発展を遂げることを跡付けた。出来事ではなく、物を対象にするとはいえ、図録にするという行為の背景には制作の意図が存在し、明治初期の国家的事業においてそれはまさに出来事に匹敵することである点にも言及された。

増野恵子氏(早稲田大学非常勤講師)は、「見える民族、見えない民族 『輿地誌略』の世界観」と題して、内田正雄による明治初期の小学校教科書として人気の高かった絵入地理書「輿地誌略」4編13冊のうち385点におよぶ図版が、すでに指摘されているように内田がオランダ留学中に得た図版類に基づくものであること、そのうちの約半数がフランスで発行された週刊旅行誌「ルトゥール・イラストレ」によるものであることを指摘した。文字情報では伝わらない視覚的イメージが内包する問題として、この地理書では、西欧圏すなわち文明国では建物の図版が多く、非西欧圏、すなわち未開発国では人種に関する図版が多く、また、日本については図が見られない点を指摘した。これは、日本人自らが見る立場と位置づけているとも考えられるが、この時期に内田自らが日本の位



置を文明国とも非文明国とも位置づけられなかったことを意味するとの解釈を示した。

金子隆一氏（東京都写真美術館学芸課専門調査員）は、「内田九一の西国巡幸写真」と題して、写真の系譜上長崎写真の上野彦馬の弟子であった内田九一が明治5年（1872）の天皇西国巡幸に随伴した際の写真の分析を通して、天皇の眼差しで撮る写真という視覚から、写真の眼差しの問題を指摘された。内田は天皇が観た景色であろう、伊勢、大阪、京都、長崎（海路）、熊本、鹿児島風景をパノラマ写真として撮影したが、天皇が赴かなかった大阪・神戸では、内田の写真師としての眼差しで自由裁量が効いていることが明確であると指摘された。ここでも、やはり、写真師の視線の問題が論じられた。

以上、二つのシンポジウムで非文字資料としての版画や写真に関して共通して指摘されたのは、何を描くか、あるいはなにを撮るのかという制作者の意図の問題と、これと不可分に結び付く、どのように表現するのかという問題であった。これに関連して論じられるべき問題としては、版画にしろ、写真にしろ、大量複製の製品である以上、これらのこの時期におけるメディアとしての役

割、すなわち、どのように流布され、この受け手はどのような人々であったのかということに話題が広がらなかったのは、コーディネーターの至らぬ点であった。

しかしながら、二つのシンポジウムを経て、19世紀後半外国からの圧力によって開国を迫られた日本の特殊な政治的社会的状況下で、版画や写真がメディアとして果たした役割、社会への啓発力、問題の深さと広がり、やがて大衆の時代となる20世紀社会で写真が果たす影響などの問題について具体的な展望などが得られた。（北原）



パネルディスカッションの一光景

同時開催 企画展示

これら二つのシンポジウムの開催中、「浮世絵の常識と非常識 復刻版でみる『名所江戸百景』」展を開いた。11月18日から11月30日まで、中一日休日を挟み、11日間の開催、国際シンポジウム当日は東京伝統木版画工芸共同組合の協力を得て、木版画摺り師の実演を盛り込んだ。入場者521人という盛況であった。なお、この展示は、

原信田實氏による展示構成、展示場設計を金子隆一氏、パネル作成などを2003年、2004年度PDの富沢達三氏の協力を得て、北原が企画を実施担当した。また、渋谷写真と渋谷フィルムの紹介を行う「常民研と非文字資料 映像でつづる昭和初期の日本 渋谷フィルムの世界」の企画展示も同時開催され、好評を博した。（北原）



展示会場では原信田氏によるミュージアムトークや木版画摺り師の実演が行われ、熱心に説明をきく来館者の姿が多数みられた。



日本常民文化研究所所蔵の渋谷写真の紹介と渋谷フィルムの上映が行われた。